

# 《なりゆき泥棒》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニア協会紀要）第13号（1999年4月発行）の拙稿『ロッシニア全作品事典（8）《なりゆき泥棒》』ですが、増補改訂した決定版をHPに掲載します。（2012年12月）

## I-8 なりゆき泥棒 *L'occasione fa il ladro*

劇区分 1幕のブルレッタ・ペル・ムジカ (burletta per musica in un atto)

台本 ルイーダ・プリヴィダリ (Luigi Prividali,?-?) 全18景、イタリア語

原作 ウジェーヌ・スクリーブ (Eugène Scribe,1791-1861) の1幕喜劇『思いがけぬ花婿、または、なりゆき泥棒 (*Le Prétendu par hasard, ou L'Occasion fait le larron*)』（1810年1月13日、パリのヴァリエテ=パノラマ劇場 [Théâtre des Variétés-Panorama] 初演）

作曲年 1812年10月末～11月前半（解説参照）

初演 1812年11月24日（火曜日）、サン・モイゼ劇場、ヴェネツィア

人物 ①ドン・エウゼービオ Don Eusebio (テノール、d'f#) ……ベレニーチェの叔父  
②ベレニーチェ Berenice (ソプラノ、b-c) ……アルベルト伯爵の婚約者  
③アルベルト伯爵 Conte Alberto (テノール、d'-b) ……ベレニーチェの婚約者  
④ドン・パルメニオーネ Don Parmenione (バス [ブッフオ]、bb-f) ……  
⑤エルネスティーナ Ernestina (メゾソプラノ、bb-a) ……  
⑥マルティーノ Martino (バス [ブッフオ]、bb-f#) ……召使  
他に、宿屋の給仕、ドン・エウゼービオの召使たち（黙役）

初演者 ①ガエターノ・ダル・モンテ (Gaetano dal Monte,?-?)  
②ジャチンタ・カノーニチニグイデー (Giacinta Canonici-Guidi [初版台本は Giacinta Guidi Canonici],?-?)  
③トンマーゾ・ベルティ (Tommaso Berti,?-?)  
④ルイーダ・パチーニ (Luigi Pacini,1767-1837)  
⑤カロリーナ・ナゲル (Carolina Nagher,?-?)  
⑥フィリッポ・スパーダ (Filippo Spada,1789c-1838)

管弦楽 2フルート/1ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、1ファゴット、2ホルン、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

演奏時間 約90分

自筆楽譜 フランス国立図書館（音楽院文庫）、パリ

初版楽譜 Tito di Gio.Ricordi,Milano,1855.（ピアノ伴奏譜）註：19世紀に出版された本作唯一の全曲楽譜。

全集版 I/8 (Giovanni Carli Ballora, Patricia Brauner, Philip Gossett 校訂,Fondazione Rossini,Pesaro,1994.)

楽曲構成 （全集版に基づく）

- N.1 序曲 [シンフォニア]（ハ長調、3/4拍子、アンダンテ～ハ短調、4/4拍子、アレグロ）と導入曲〈怒れる黒雲、天を震わせ *Frema in cielo il nembo irato*〉（アルベルト、パルメニオーネ、マルティーノ）  
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈旅での出会いはうれしい慰め *Grato conforto è l'incontrar per viaggio*〉（アルベルト、パルメニオーネ、マルティーノ）
- N.2 パルメニオーネのアリア〈何という運命、何という偶然 *Che sorte, che accidente*〉（パルメニオーネ、マルティーノ）  
— アリアの後のレチタティーヴォ〈それはおよしなさい *Non lo permetto*〉（エルネスティーナ、エウゼービオ）
- N.3 ベレニーチェのカヴァティーナ〈その時が近づく *Vicino è il momento*〉（ベレニーチェ）  
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈見たこともない男と結婚するなんて *Sposarsi ad un, che non s'è mai veduto*〉（ベレニーチェ、エルネスティーナ、パルメニオーネ、マルティーノ）
- N.4 五重唱〈この礼儀正しく優雅な者は *Quel gentil, quel vago oggetto*〉（ベレニーチェ、エルネスティーナ、アルベルト、エウゼービオ、パルメニオーネ）  
— 五重唱の後のレチタティーヴォ〈どうしていいか判らない *Non so più cosa far*〉（エルネスティーナ、アルベルト、エウ

ゼービオ、マルティーノ)

N.5 アルベルトのアリア〈どんな神聖な務めも D'ogni più sacro impegno〉(アルベルト)

— アリアの後のレチタティーヴォ〈あの断固とした口調と *Quei fermi accenti*〉(ベレニーチェ、エルネスティーナ、パルメニオーネ)

N.6 ベレニーチェとパルメニオーネの二重唱〈あなたが花嫁だって！ *Voi la sposa!*〉(ベレニーチェ、パルメニオーネ)

— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈もう逃げ場がない *Qui non c'è scampo*〉(エルネスティーナ、エウゼービオ、マルティーノ)

N.7 マルティーノのアリア〈私の主人が男であることは *Il mio padrone è un uomo*〉(マルティーノ)

— アリアの後のレチタティーヴォ〈ちょっと待て、どこに行く？ *Senti, aspetta, ove vai?*〉(ベレニーチェ、エルネスティーナ、アルベルト、エウゼービオ、パルメニオーネ)

N.8 レチタティーヴォ〈あなた方が不確かなら *Ma se incerti voi siete*〉とベレニーチェのアリア〈あなた方は花嫁を求め *Voi la sposa pretendete*〉(ベレニーチェ、アルベルト、パルメニオーネ)

— アリアの後のレチタティーヴォ〈お待ちなさい。何です？ *Fermatevi. Che c'è?*〉(エルネスティーナ、アルベルト、エウゼービオ、パルメニオーネ)

N.9 フィナーレ〈元の私に戻ります *Quello, ch'io fui, ritorno*〉(ベレニーチェ、エルネスティーナ、アルベルト、エウゼービオ、パルメニオーネ、マルティーノ)

**物語** (時の指定なし。場所は見せかけのナポリとその近郊)

雷鳴とどろく嵐の晩の、とある旅籠の一室。ドン・パルメニオーネが召使マルティーノを伴って食事をしていると、下男を連れてアルベルト伯爵が雨宿りにやって来る。意気投合した2人は酒を酌み交わす(N.1 シンフォニアと導入曲)。結婚のためナポリへ行く途中と語る伯爵は、嵐が止むと大急ぎで出て行こうとして下男が主人の鞆を取り違えてしまう。パルメニオーネが気づいた時は後の祭。だが、伯爵の鞆を開けたパルメニオーネは婚約者ベレニーチェの肖像を見て一目惚れし、伯爵を騙って彼女と結婚しようと思いつく(N.2 パルメニオーネのアリア)。

ナポリのエウゼービオの家。結婚間近なベレニーチェの心は期待と不安に揺れ動いている。彼女は亡き父の友人の息子という顔も知らない相手と一緒にしようとしていたのだ(N.3 ベレニーチェのカヴァティーナ)。ベレニーチェは婚約者の真心を確かめようと、エルネスティーナと服や立場を交換することを思いつく。そこへ伯爵に扮したパルメニオーネが到着する。彼はベレニーチェを装うエルネスティーナを見て肖像と違うことに気づきながらも婚約者として名乗りを上げ、エルネスティーナも彼を気に入ってしまう。2人が退場すると、今度は本物のアルベルト伯爵とベレニーチェとがばったり出会う。彼は花嫁の姿を認めるが、ベレニーチェは「あなたの婚約者は他におりますわ」と言ってやりすごす。だがエウゼービオ、本物の伯爵と贋伯爵、本物の花嫁と贋花嫁が顔を揃えて誰が誰やら判らなくなり、大混乱に陥る(N.4 五重唱)。

エルネスティーナをベレニーチェと思いついたアルベルトは、自分が本当の伯爵なのだと彼女に訴える(N.5 アルベルトのアリア)。一方ベレニーチェは自分のことを小間使いと思いついてパルメニオーネに対して「本当の花嫁は私です」と告げ、彼が贋伯爵であることも見破る(N.6 ベレニーチェとパルメニオーネの二重唱)。ほどなくマルティーノもエウゼービオとエルネスティーナから詰問され、自分の主人の正体を明かす(N.7 マルティーノのアリア)。すべてが露顕しても花嫁を奪い合おうとする2人の求婚者に、ベレニーチェは「こんな侮辱は我慢できない」と怒りを露にする(N.8 レチタティーヴォとベレニーチェのアリア)。観念したパルメニオーネが、自分は友人のエルネスト伯爵の妹を探しに来たのだと告白すると、驚いたことにエルネスティーナが伯爵の妹その人と判る。彼女はパルメニオーネの求婚を受け入れ、アルベルトとベレニーチェも誤解を解く。かくして鞆の取り違えが発端で2組の結婚がまとまり、ハッピーエンドとなる(N.9 フィナーレ)。

**解説**

**【作品の成立】**

前作《試金石》(1812年9月26日ミラーノのスカラ座初演)は合計53回の上演が行われる大成功を収めたが、ロッシーニはこれに先立って病気に罹り、スカラ座の初演予定を1週間ほど遅らせてしまった。この年の1月にロッシーニがサン・モイゼ劇場の興行師アントニオ・チェーラと結んだ契約では、3作の新作ファルサを同年春・秋・翌年謝肉祭期間に提供することが約束され、《なりゆき泥棒 (*L'occasione fa il ladro*)》<sup>1</sup>として成立する新作は10月27日に初演予定だった。けれども病気が原因でロッシーニのヴェネツィア行きが遅れ(本来なら9月末か10月初めに到着する必要があった)、10月20日の数日前になって姿を現したのだった。

ロッシーニが母への手紙にヴェネツィアへの旅とその後の出来事を書いたのは、チェーラとのトラブルが解決した10月30日で、「到着するや否や興行師チェーラがぼくに [到着の遅れについて] 抗議し、ぼくが義務を怠ったために生じたす

べての損害と費用の支払いを求めましたが、最後に折り合いがつかしました」と述べている。そして「ぼくは15日間でファルサを作曲すると約束し、今日がその1日目です」と記している<sup>2</sup>。ロッシーニの宿泊場所が宿屋でなくリヴィエール家 (Famiglia Rivier) であることも、同じ手紙で報告されている。

健康を取り戻したロッシーニは、15日間での作曲に自信を持っていたようだ。そして15日間かけずに11日間で《なりゆき泥棒》をほぼ書き上げたことは、11月18日に母に送った手紙に「11日間のぼくの音楽は、稽古でとても喜ばれています」としたことで明らかである<sup>3</sup>。ロッシーニが猛烈なスピードで作曲したことは、全集版《なりゆき泥棒》の校訂者が、自筆楽譜に書き急いだ跡があり、数人の協力者の筆跡が混在する、としたことで判る。レチタティーヴォ・セッコはその一人の筆で書かれ、管弦楽パートも協力者によって肉付けされているという（ちなみにロッシーニはマルティエーノ役のパートをバス記号で作曲したが、同役のレチタティーヴォ・セッコはテノール記号で書かれている）<sup>4</sup>。その一方、旧作からの転用が序曲の嵐の音楽のみで、ロッシーニが一气呵成に作曲したことが判る。それゆえ初演から4日後の『ジオルナーレ・ディバルティメンターレ・デッラドリアーティコ (*Giornale dipartimentale dell'Adriatico*)』紙 (11月28日付) が、「マエストロ・ロッシーニ氏はその音楽を11日間で書いた。燃え上がる天才の勢いかられたとしても、それはあまりに短い期間だった」<sup>5</sup>と書いたのも、あながち間違いではあるまい。

### 【特色】

この作品は九つのナンバーからなり、序曲を独立させずに導入曲に繋げて第1曲としたのは斬新な手法で、それ以前のロッシーニ作品には例がない。序曲の主部に当たる嵐の音楽は、前作《試金石》第2幕の嵐の場面の再利用であるが、これは《なりゆき泥棒》のドラマ冒頭が嵐という設定とも関連しており、導入曲は愛の思いを歌うアルベルト伯爵の叙情的なソロと嵐の描写を挟んで陽気な男声三重唱で閉じられる。続くパルメニオーネのアリア〈何という運命、何という偶然 (*Che sorte, che accidente*)〉 (第2曲) は実質的にマルティエーノとの二重唱で、人物が順次登場のカヴァティーナを歌う定型を離れている。これはルイーダ・プリヴィダーリの台本のみならず、スクリーヴの原作とも関係した措置であろう。

ヒロインのベレニーチェは二つのナンバーを与えられ、登場のカヴァティーナ〈その時が近づく (*Vicino è il momento*)〉 (第3曲) は亡き父の友人の息子というだけで顔を知らぬ婚約者の訪問を持ちながら、期待と不安に揺れる心を吐露する。フィナーレ前のアリア〈あなた方は花嫁を求め (*Voi la sposa pretendete*)〉 (第8曲) も豊かな音楽と柔軟な構成を持ち、切れの良いアジリタとコロラトゥーラの妙技を披露する。その第一部分は実質的な三重唱で、アリアに先立つレチタティーヴォ・アッコンパニャートもロッシーニが作曲している。

独立した重唱は二つあり、中央に位置する五重唱〈この礼儀正しく優雅な者は (*Quel gentil, quel vago oggetto*)〉 (第4曲) はバスの喜劇的語法と女声の柔らかな旋律を巧みに重ねるパルメニオーネとエルネスティーナの二重唱で始まり、アルベルトとベレニーチェの叙情的な重唱と経過部を挟み、エネルギー溢れる五重唱で閉じられる。ベレニーチェとパルメニオーネの二重唱〈あなたが花嫁だって! (*Voi la sposa!*)〉 (第6曲) も男女の会話を巧みに音楽化しつつ、歌の魅力でも楽しませ、形式も柔軟である。これに対し、アルベルト伯爵のアリア〈どんな神聖な務めも (*D'ogni più sacro impegno*)〉 (第5曲) は妙味に乏しく、マルティエーノによる〈私の主人が男であることは (*Il mio padrone è un uomo*)〉 (第7曲) は才気ある伴奏音楽で聴かせるシャーベット・アリアとなっている。フィナーレのアンサンブルは常套的ながら、全体としては起承転結が巧みなファルサに仕上がっている。

とはいえ本作に続く半年間に生み出される《ブルスキーノ氏》《タンクレーディ》《アルジェのイタリア女》の音楽的充実と天才の発露を思うと、《なりゆき泥棒》はまだ佳作の域を出ない、と言っても許されるだろう。なお、自筆楽譜は人手を経て19世紀半ばにはパリの出版社主アントーニオ・パシーニの所有となったと推測され、これを見せられたロッシーニは楽譜の冒頭頁に、「この楽譜を私の自筆と認める (Riconosco questo spartito per mio autografo)」と書き添えている。



《なりゆき泥棒》初版楽譜の表紙  
(リコルディ社、ミラーノ、1855年)

### 【上演史】

初演は1812年11月24日サン・モイゼ劇場にて、ステーファノ・パヴェージのファルサ《やきもち焼きたちへの警告 (*L'avvertimento ai gelosi*)》(1803年) 再演との2本立てで行われた (1作のバレエも併演)<sup>6</sup>。前記の新聞批評を読むかぎりまずまずの成功を収めたが、シーズン終了間際のため12月3日までに5回しか上演されなかった。最初の再演は1818年11月5日にナポリのヌオーヴォ劇場で《靴の取り違え (*Il cambio delle valigie*)》の題名で行われ (但し、この変更はロッシーニは関与しない)、続いて1820年から27年までの間にパルマ (ドゥカール劇場)、フィレンツェ (ココメロ劇場)、ローマ (ヴァッレ劇場)、ミラーノ (カルカノ劇場とスカラ座)、ヴァレーゼ (ソチャーレ劇場)、ザーラ、トリノー (スーテラ劇場と

カリニャーノ劇場)、ヴェネツィア(サン・ベネデット劇場)で上演され、国外でもバルセロナ(1822年7月18日)、リスボン(1826年2月6日サン・カルロス劇場)に続いて1830年にサンクト・ペテルブルク、1834年にはドイツ語訳がウィーンで上演されている。しかし、これを最後にいったん演目から外れ、1869年にトリノーで一度取り上げられた後はロッシーニ生誕100周年の1892年7月10日にペーザロで再演されるまで日の目を見なかった(この上演でテノールのアレッサンドロ・ボンチがデビューした)<sup>7</sup>。

全集版による初上演は1987年8月16日、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルで行われた(アウディトリウム・ペドロットティ。サルヴァトーレ・アッカルドのオペラ指揮者デビュー。ベレニーチェ:ルチアーナ・セッラ)。日本初演はロッシーニ生誕200周年の1992年7月8日「東京の夏音楽祭'92」の訳詞上演(新宿文化センター。演出:平尾力也、指揮:松尾葉子)。原語初演は2002年9月12日、新国立劇場小劇場で行われた(演出:恵川智美、指揮:佐藤宏)<sup>8</sup>。

## 推薦ディスク

- ・2005年7月バート・ヴィルトバート、ヴィルトバートのロッシーニ音楽祭上演のライブ録音(Naxos CD2枚組)

フォリアーニ指揮ヴェルテンベルク・フィルハーモニー管弦楽団 エリザベッタ・マルティロージャン(S)  
ファニー・アントネロウ(Ms) ガーダー・トール・コーテス(T) ジャンピエーロ・ルッジェーリ(Br)ほか



<sup>1</sup> さまざまな文献にみられる副題「靴の取り違え (*Il cambio della valigia*)」は、リコルディ社が《なりゆき泥棒、または靴の取り違え (*L'occasione fa il ladro, ossia Il cambio della valigia*)》と題して初版楽譜を出版したことに起因するが、オリジナルの題名ではなく全集版も採用していない。

<sup>2</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.31-32. [書簡 IIIa.13]

<sup>3</sup> *Ibid.*, pp.33-34. [書簡 IIIa.14]

<sup>4</sup> 詳細は全集版《なりゆき泥棒》の序文 p.XXIV.及び校注書で明らかにされている。

<sup>5</sup> *Ibid.*, p.XXVI.

<sup>6</sup> 該当作はドメニコ・カイアーニ (Domenico Cajani) 作曲《2人の女ライヴァル (*Le due rivali*)》と思われるが、印刷台本に「全シーズンのバレエ作曲者ジュゼッペ・カイアーニ (Giuseppe Cajani)」とあり、シーズン前半に上演されたジュゼッペ・カイアーニ作曲《アルジェアとウラツ (*Argea ed Ulasso*)》の可能性もある。

<sup>7</sup> 全集版序文 p.XXVII.による。当時ボンチはペーザロ音楽院の学生だったので、現代の文献が彼のデビューを1896年パルマとするのも間違いではない。

<sup>8</sup> プログラムに名前が載っていないが、筆者もこの上演のアドヴァイザーとして稽古に関与している。